

MILAN DESIGN WEEK 2024

「パラドックスを両立させるデザインのカ」

内と外、パブリックとプライベート、
伝統と革新、過去と現在そして未来へ

取材・文 浦田薫(デザインジャーナリスト)

ミラノサローネの発展と進化

第62回ミラノサローネ国際家具見本市には、世界中から37万人を超える来場者が訪れた。前年に比べて業界関係者数28.6%増、来場者数20.2%増、隔年で開催されるキッチンとバスルームの展示(エウロクチーナ/FTK テクノロジー・フォー・ザ・キッチン、サローネ国際バスルーム見本市)があった2022年比11万人増という記録を更新した。経済社会が閉塞感を抱えながらも、サローネサテリテ参加デザイナーも含めると、出展数は35カ国から1950組。トレード業界の国別ランクでは、中国をトップに、ドイツ、スペイン、ブラジル、フランス、アメリカが続く。日本は15位であった。ミラノサローネ代表のマリア・ポッコは、「ミラノサローネ国際家具見本市は、世界でも唯一無二のイベントであり、市場の新しい領域との対話に不可欠な架け橋であることを再確認しました。イノベーションに開かれた大陸間都市は、国内外経済の主要部門の競争力を加速・強化させています。まさに永続的な価値、製品と雇用、物質と非物質といった文化の偉大な『工場』なのです」とコメントした。

35歳以下の若手デザイナーが展示するサローネサテリテは、マルヴァ・グリフィン・ウィルシャーが創設して以来、今日までに1万4000

人を超える若い才能に焦点を当ててきた。今年は、22カ国から600人を超える若手デザイナーと13カ国から22の教育機関が参加。25周年に伴って、ミラノトリエンナーレでは特別展が開催された。デザインの歴史を刻んできたブランドと並んで若手デザイナーに発表の機会を提供してきたサローネサテリテ。思考やヒューマンネットワークの構築、プロジェクトを育むトレーニングの場として機能すると共に、

第62回ミラノサローネのキーワードとなる「進化」の価値を改めて確認する契機につながったと言える。

キッチンとバスルームについての展示も展開された本年は、気候変動による自然環境やエネルギーへの配慮も継続的になされ、節水やフードロス対策への取り組みについて考えるトークプログラムやプレゼンテーションも活発に行われた。



ミラノサローネ国際家具見本市会場(撮影/Romano Dubbini 提供/Salone del Mobile.Milano)



Under the Surface

Curated by Accurat,
Design Group Italia and Emiliano Ponzì Salotto.NYC

水消費における日常的な習慣がもたらす影響について気づきを与えるインスタレーション。水没した島の形状をしたレリーフの中で光が揺らぐ。世界の水消費や複雑なデータをより分かりやすく視覚化したデザイン「ビジュアル・ナラティブ」で表現された(撮影/ Paolo Riolzi 提供/ Salone del Mobile.Milano)

DESIGN KIOSK

出版社・Corraini (コライーニ) がキュレーションし、DWAデザインスタジオがデザインした、ブランディング企業・インターブランドとのコラボレーションによる「デザイン・キオスク」がスカラ座広場に出現した。展示後、サステナブルな素材を使った構造は解体・再利用される予定。ミラノ・トリエンナーレ館長Stefano Boeri (ステファノ・ボエリ) を始め、Cino Zucchi (チーノ・ズッキ)、Luca Nichetto (ルカ・ニケット)、Parasite 2.0 (パラサイト2.0) といった業界を牽引するゲストとのトークセッションが行われ、市民と直接対話する空間が生まれていた(提供/ Salone del Mobile)



Universo Satellite. 25 years of SaloneSatellite

Beppe Finessi (ベッペ・フィネッシ) がキュレーションし、Ricardo Bello Dias (リカルド・ベッロ・ディアス) が空間構成を手掛けた。過去にSaloneSatelliteで発表したプロジェクトのセレクションが、マルヴァ・グリフィン・ウィルシャーの壮大な「発明」の変遷を記録したダイアリーと共に展示された(撮影/ Saverio Lombardi Vallauri 提供/ Salone del Mobile.Milano)



SaloneSatellite

35歳以下の若手デザイナーの国際的な登竜門

LIMINAL ATSUSHI SHINDO

「空気感をデザインする」をテーマにした進藤篤の新作「LIMINAL」は、平板の焼き入れ鋼材をリング状に成形し、サイズを変えながら一列に連ねた全長6mのインスタレーション。中央に通したLEDのライン照明が内側を照らし、そのかすかな輝きが、空間にあいまいな輪郭を描き出す。根源的な魅力と引力を秘めた「風景」のような存在を表現する(画像提供/ ATSUSHI SHINDO)



Ku-Mu 西原海

日本の伝統的な建築技法である「組木」を用いたパーティション「Ku-Mu」は、木とアクリルのパーツを交差させたものを一つのモジュールとして、互い違いに組み合わせることで自立する。角度によってパーツの隙間から見える景色が変化して空間を緩やかに間仕切る。パーツ同士をはめ込んだ際に隠れてしまう溝形状の仕口の美しさを可視化させている。宮大工による伝統的な手作業の木材加工技術と、3D切削機による近代的な機械のアクリル加工技術との対比を示したデザイン(画像提供/ Kai Nishihara)





POSSUM CHAIR

Kodai Iwamoto Design

デザイナー・岩本航大による家具「POSSUM CHAIR」。タスマニアに伝わる、作者不詳のポッサムチェアをモチーフとした提案で、そのオリジナルは、ハンドツールで無垢材を削って製作されたという。座面を突き抜けるように伸びた脚でハンドレストを支える構造が特徴で、座ると体重によって脚と座面が強固に接合される。生物のようにゆっくりと進化してきた家具を主題に、ポッサムチェアの特徴を残したまま、座り心地を向上させるために背もたれやシートを有機的なフォームに仕上げている (画像提供/Kodai Iwamoto Design)

Ras Alhague PLASMA

ダイニングテーブル「Ras Alhague」の天板は、厚さ2mmの鉄板を曲げて、その両端を構造用まぐさに接続。下部の水平支柱が圧縮後の力を吸収できる構造技術により、天板が完全な水平を保つと同時に、軽やかさと優雅さを表現する。デザインは、建築家Alberto Smaldone (アルベルト・スマルドーネ) が立ち上げたデザインスタジオPLASMA (画像提供/PLASMA)



Silver Lining collection

aretai

製菓産業の製造上の欠陥により廃棄されたガラスバイアル瓶のアップサイクルプロセスから生まれた「Silver Lining collection」。本展では、ガラスバイアル瓶を組み合わせた照明器具とパーティションを展示した。デザインしたaretaiは、イタリアとスペインに拠点を置く建築家やデザイナー、グラフィックデザイナーから成る国際的なユニット。従来のデザインスタジオの概念を再定義し、集合知に向けて相互依存を進化させる野心を持つ (画像提供/aretai)

ALCOVA

ミラノ郊外の二つの邸宅を会場にしたサイトスペシフィックな展示



ALCOVA: Villa Bagatti Valsecchi

撮影/ナカサ&パートナーズ



GARDEN HOUSE

OBJECTS OF COMMON INTEREST

ニューヨークとアテネを拠点に活動するデザインスタジオOBJECTS OF COMMON INTERESTが提案する「GARDEN HOUSE」。19世紀に建立されたヴィラの中庭に円形のインフレートドームを設置し、人々が集うと共に、異なる時代を結ぶインタラクティブな回響を引き起こす空間となった (撮影/ナカサ&パートナーズ)

サイトスペシフィックな展示から都市計画への発展へ

ミラノデザインウィーク期間中、ミラノ市内や近郊のショールーム、ギャラリー、バラッツォや倉庫を活用して、毎年300以上のイベントや展示が開催される。

見本市の在り方や概念が変化を遂げる過程で、人々が住まう街に期間限定でも誕生するサイトスペシフィックな展示への関心は、着実に高まっている。今日では、フォーリサローネの花形名所だったトルトーナ地区での「スーパースタジオ」などのイベントにかつての求心力

は感じられず、2013年にスタートして以降新しいアイデアとイノベーションの発信地として知られた「ランブラーテ」は、パンデミック後に復帰できず19年で活動を停止した。そのバトンを受け継いでというべきなのか、新しい時代に沿うべき、共に考え、対話する場が求められている。

そんな状況下で、市内から離れた展示会場であっても、吸引力を備えたイベントが誕生している。今年の「ALCOVA」は「Villa Bagatti

Valsecchi (ヴィラ・バガッティ・ヴァレスキ)」と「Villa Borsani (ヴィラ・ボルサーニ)」の2カ所の会場を設け、実績を積んだデザイナーの他、新鋭やデザイン学校も参加して、建築や空間と対話する70の展示を展開した。Studio VedètのValentina Ciuffi (ヴァレンティーナ・チウッフィ)とSpace CaviarのJoseph Grima (ジョセフ・グリマ)により18年に創設されて以来、6大陸400以上のデザイナー、ギャラリー、学校などのプロジェクトを紹介している。



CALICO WALLPAPER
PRESENTS
MONUMENT BY COLIN KING
CALICO WALLPAPER

CALICO WALLPAPERは、ニューヨークを拠点に活動する、伝統的手法と革新的な技術を取り入れた壁紙のメーカー。インテリアスタイリストColin King (コリン・キング)とコラボレーションした新コレクションNuanceとPerceptionは、歴史的なフレスコ画やそれらの色にインスパイアされている。本展では、それらの壁紙を全面に貼ったモノリスのようなプレゼンテーション「MONUMENT」を展開した(撮影/ナカサ&パートナーズ)



2084: A DIORAMA OF THE FUTURE
HEAD - GENÈVE, GENEVA UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

ジュネーブ造形芸術大学HEADのインテリア建築マスタークラスの学生たちによるプロジェクト「2084: A DIORAMA OF THE FUTURE」は、気候変動を経て将来のエコシステムのジレンマに直面しているであろう2084年の世界を題材に、人新世以降の時代を想像した実験・没入型のパフォーマンス・インスタレーション(撮影/ナカサ&パートナーズ)



PRINTED NATURE
HARRY THALER STUDIO + ECONITWOODTM

産業廃棄材になった木くずが、デザイナーのHarry Thaler (ハリ・タラー)とECONITWOOD社の3Dプリンターによって、ソファや照明器具となって再び息吹を与えられた「PRINTED NATURE」。ヴィラの一室に木くずをまき、砂漠のように見立てたインスタレーションは、テクノロジーと自然環境の共生を示唆している(左:撮影/Piergiorgio Sorgetti 提供/@alcova.milano 右:撮影/ナカサ&パートナーズ)



ALCOVA :
Villa Borsani

撮影/ナカサ&パートナーズ



SUNDAY LIGHT
SUNDAY

イギリスのロイヤル・カレッジ・オブ・アートで共に学んだNat Martin (ナット・マーティン)とSean Hammett (シアン・ハメット)が制作したペンダントライト「SUNDAY」は、晴れた日の青空の下にいるかのような気分させてくれる3万ルーメンの照明器具。1日30分間照明を浴びるだけで、季節性情動障害を克服できる効果もある(撮影/Piergiorgio Sorgetti 提供/@alcova.milano)

Depth of a Line
WKND LAB

Eunji Jun (ウージン・ジュン)とHalin Lee (ハリン・リー)によるWKND LABは、韓国ソウルを拠点に活動するクリエイティブスタジオ。幸運を表現する「結び」を取り入れ、エナメル加工職人と制作した照明「Depth of a Line」は、韓国の伝統に着想を得ている(撮影/Piergiorgio Sorgetti 提供/@alcova.milano)



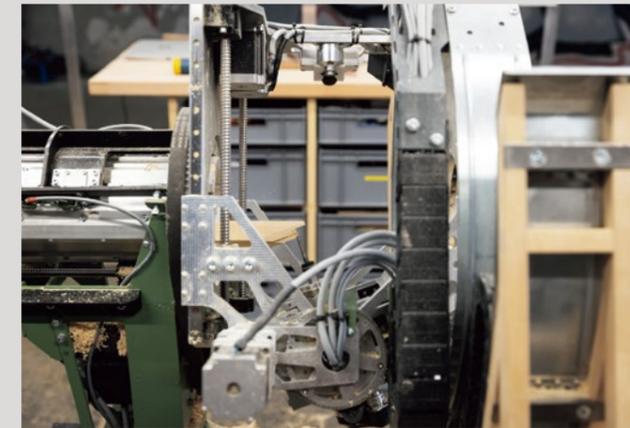
DROPCITY

高架下を活用したものづくりのプラットフォーム



Future frames Muid Kiel + Studio Streev

ドイツ・キール市のMuid美術学校のインダストリアルデザイン学科は、新しいテクノロジーによって天然素材を有効活用するためのリサーチを得意とするドイツのStudio Streevと協働し、建築用の新しい構造システム「Future frames」を考案。Studio Streevが開発したCNCマシンは、日本の仕口技術を参照したもの。ミラノ市内の倒木を加工し、高架下にアーチを組み立てていく(撮影/ナカサ&パートナーズ)

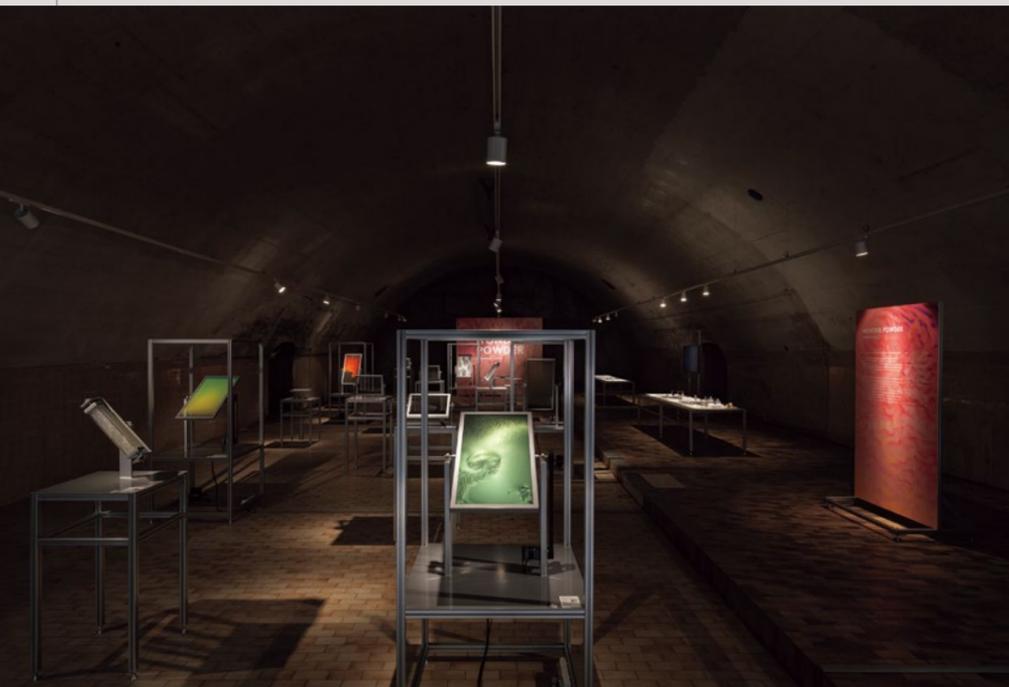


ミラノ中央駅の高架下空間を活用した展示空間「Dropcity」(撮影/ナカサ&パートナーズ)

FLUID GARDENS

DOOR & OBJECTS OF COMMON INTERESTS

アコーディオン式のスライドドアを制作するイタリアのメーカーDOORが、ニューヨークとアテネを拠点にするデザインスタジオOBJECTS OF COMMON INTERESTにキュレーションを依頼した展示「FLUID GARDENS」。空間を自在に仕切り、連結、開放するモダンでカラフルなテキスタイルのバリエーションを紹介した(撮影/Piergiorgio Sorgetti 提供/@alcova.milano)



WONDER POWDER

島津製作所 + we+

京都に本社を置く、創業149年の精密機器メーカー島津製作所とコンテンポラリーデザインスタジオwe+による、粉末の可能性を模索するリサーチプロジェクト。粉末化された素材の水中での動きや、科学的分析、研究成果とリサーチの一部、インスタレーションが展示され、新たな視点で粉末の美しさを捉えるを試みた。ミラノ市内で発表された展示から最も優れたプロジェクトに与えられる「Fuorisalone Award 2024」で Mention に選出された。(撮影 / Hiroki Tagma)

Drop Office for Dropcity

高架下の空間に設えられた、スイスを拠点として活動する建築家、クリスチャン・ケレツのドロップオフィス。整然と設えられたオフィスの室内には、ケレツによる数々のプロジェクトの模型が並ぶ(撮影 / ナカサ&パートナーズ)



INDUSTREAM

XL Extralight®

シューズのソールなどに用いられる超軽量素材XL Extralight®の محصولاتを、マテリアルと技術の関係からひもとく展示。身の回りに当たり前にあるさまざまなプロダクト全てに歴史や文化、技術があることを暗示する。高架下の空間を塞ぐように壁を立て、背面に展示が展開された(撮影 / ナカサ&パートナーズ)



Gerard Kuijpers

80年代初期より、主にスチールと石を使った作品を手掛ける独学のデザイナー兼アーティストのGerard Kuijpers (ジェラルド・クイパーズ)。彼にとって、明確な機能を持たせることが最終的な創作の意図ではない。大理石とスチール、木材とガラスといった組み合わせから緊張感とバランスを探りつつ相互作用を図り、それぞれの個性が強調される瞬間を捉えている (撮影/Amber Vanbossel)



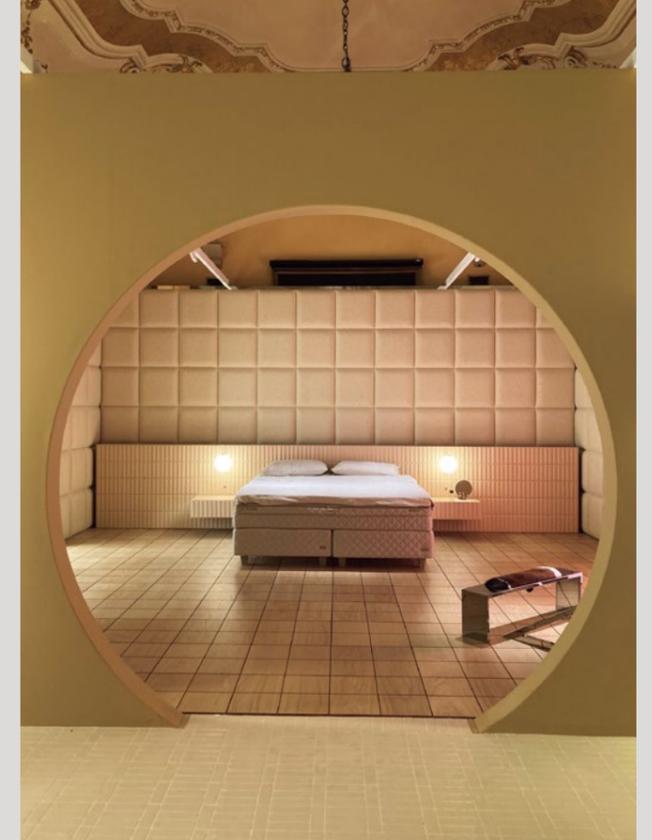
Studio Elémentaires

「不思議な国のアリス」にインスパイアされたペンダントライト「Tea Party」のプレゼンテーション。天井から吊られた円盤の下面に、七つのディスクが配置され、各々の中心からずらした位置に照明が取り付けられている。ディスクが回転することで、視線を別の点へ滑るように導き、軽快なメリーゴーランドに揺られる喜びを想起させる。デザインは、フランス人アーティスト Apolline Couverchel (アポリンヌ・クヴェルシェル) とGauthier Haziza (ゴティエ・アジザ) が率いるStudio Elémentaires (撮影/Stanislas Huaux / Jeremy Marchant)



Interni

ミラノ大学を会場に、毎年数々のインスタレーションを展示するイタリアのデザイン誌Interniの企画展。創業70周年の今年は、「Cross Vision」を主題に、横断的思考を物理的に表現した作品を紹介した。ベルリンを拠点に、ランドスケープや建築の分野で活動するデザインスタジオTopotek1は、欧州の伝統的なベンチと古代ペルシアの風の塔を組み合わせた、公共空間向けの「Climate Adaptive Bench」をデザインした。冬は、太陽熱を吸収して色の濃い座面を温かくし、夏は、塔の上部に設置された吸入機が暑い空気を冷却して、下部の穴からそよ風を送る仕掛けが考えられた (撮影/ナカサ&パートナーズ)



Elle Décor

「Material Home」は、素材が主役となるインテリアデザイン・プロジェクトと生活空間の進化への関心からElle Decor Italiaが企画した没入型の展示で、バラツォ・ボヴァラで開催された。インテリアと展示空間を手掛けるElisa Ossino Studioと照明デザイナーのRossi Bianchi (ロッシ・ビアンキ)、ランドスケープデザイナーStudio Antonio Perazzi (アントニオ・ペラッツィ) が監修を手掛けた。



上/七つの空間は、錬金術、パウダー、表面、反射、ソフト、オーガニック、色合いとそれぞれ特定の素材や機能にちなんで名付けられた。「ソフト」を演出した寝室では、壁面にSlalom社のテクセル原毛100%の吸音壁「Raw1」を使用。ヘッドボードのタイルは、丸みを帯びたエッジが特徴の41ZERO42社の「Biscuit」、床は、オーク材の寄木細工のフローリングを正方形に敷き詰め、床と壁がシームレスに連続する効果が生み出された。円形の出入り口が、ベッドルームとバスルームを結び、下/スチール製のモノリスカウンターが設置されたキッチン空間では、「表面」を演出。壁面では、De Castelli社のメタル被覆材Velaを研磨加工し、カーテンのように柔らかく仕上げている (撮影/浦田薫)

Objects with narratives

Objects with Narrativesは、物語性のある作品を展示するベルギーのコンテンツギャラリー。今回、ロッテルダムで活動するオーストリア出身のデザイナーLaurids Gallée (ロリ・ガレ) による、ポリマー樹脂を用いた照明器具、ローテーブル、ベンチ、コンソールなど七つのピースで構成される「Hazy Gymnastics」コレクションを紹介した。さまざまな製造技術を学んだガレは、現代的な融合を生み出すために、常に高度な製造プロセスを考慮しながら、伝統的および民族伝承の要素を探求して現代的な物質性を作品に採り入れている (撮影/Amber Vanbossel)



Artemest

オンラインを通じてイタリアの職人技とデザインを展開するArtemestは、フォーリサローネ2回目の参加となる今回、20世紀初期に建立されたミラノの邸宅レジデンツァ・ヴィニャーレで「L'Appartamento」展を開催した。複数のキュレーターにより厳選された170点の家具やインテリアアクセサリにより、玄関、カクテル、ダイニング、リビング、ベッドルーム、そして中庭にそれぞれ世界観が演出された。写真は、モダニズムとバロック様式を対話させたVSHD Designがキュレーションしたダイニングルーム (撮影/Tomaso Lisca and Luca Argenton)

パラドックスを両立させるデザインの力

培ってきたノウハウを謳歌させ、歴史に残る家具を制作する数々の家具ブランド。今年、Porroは紀寿、Molteni&Coは白寿、Emecoは傘寿を迎えた。創業から今日に至るまで、どんな企業も競争と闘い、過渡期を乗り越えてきた。更に昨今では、零細も大手企業も社会的責任(CSR)や持続可能な開発目標(SDG's)を遵守したハードルの高いゴールを求められる。これから創業するメーカーはよほど大胆な考えと強い意志がなければスタート地点にさえ立てない。現状、メーカーやデザイナーにとって商品のコンセプト段階から素材選び、加工・製造プロセスの選択、廃棄される際の再利用・再生度の分析など一連のサイクルを明確にすることはス

タンダードな基準となっている。

また、ファッション業界ではブレタポルテとオートクチュールがあるように、家具産業でも量産を継続しながらセミオーダーやオーダー規格商品を提案するメーカーや、当初からその方向性を明確に打ち出している企業も増えている。その手法は、あえて手仕事を加えることで素材の魅力を引き出すことにもつながっている。革、紙、ファイバー、土、石、木、ガラス、アルミニウムなどの素材に応じて、経年による劣化の速度や状態は異なるが、それらの特質を検証して用途や体感のバランスをシミュレーションするデザイン業が、息の長い製品を創出していくのではないだろうか。自然環境への配慮は

地球上で生きる我々全員に共通する。製造を続ける企業が担うCSRやSDG'sが単なるマーケティングツールとして発信されてはならない。

なお、伝統や手仕事が革新や産業に相反する立場ではなく、将来的に加速して人工知能があらゆる場面で採用されていく過程で、人間が蓄積してきた体験や感受性といったソフトのパワーが産業界を操縦する基準として、より適切な評価を与えられるべきではないだろうか。

オリジナルマテリアルと持続可能性、量産品と特注品、伝統と革新といった相反する概念を編集しながら、パラドックスを両立させていくこともデザインの力量にあらう。



Kartell *

ミラノのモニュメントや建築をグラフィックで表現したブースが目玉の「Kartell Milano Urban Horizons」。軽量のカーボンファイバーフレームと籐を組み合わせたイス「BELVEDERE」や、多様な天板仕上げに対応する100%再生可能なアルミニウムのテーブルで、古典的な装飾を脚部の構造に採用した「ALBERT」などが展示された。双方をデザインした建築家Ludovica Serafini + Roberto Palomba (リュドヴィカ+ロベルト・パロンバ)は「人類が誕生して以来、衣食住を守るのが家であり、プロダクトを考案する際も建築を設計する時と同じ力と熱意を注ぎ、暮らしやすさを追求します」と語る(提供/Kartell)

Molteni *

Vincent Van Duysenがデザインした「Augusto」は、空間に合わせた多様なニーズに対応するモジュール式のソファで、直線や曲線のユニットを構成する。座面は高密度のフォームで、クッションは再生PETのポリエステル繊維を使用した。張り地は同社のファブリックから選べる。皮をオリーブ油でなめした仕上げもある。今年のブースは、建築家ピエロ・ボルタルピが設計した30年代のミラノの邸宅「ヴィラ・ネッキ」にインスピレーションを得ている(提供/Molteni)



* Salone del Mobile に出展
* * Milan Design Week に出展



Porro *

建築家のピエロ・リッソーニとスタイリストのスタジオ・グレッタ・チヴェーニニがインテリアを設えたブースは、切妻屋根の下にリビングルーム、ベッドルーム、クローゼットルーム、スタジオ、パティオを再現した空間。写真は、書棚「System HT」(デザイン:ピエロ・リッソーニ+CRS Porro)、テーブル「Ventiquattro」(デザイン:ピエロ・リッソーニ)、イス「Nid」(デザイン:クリストフ・ピエ)が配置されたスタジオ空間(提供/Porro)

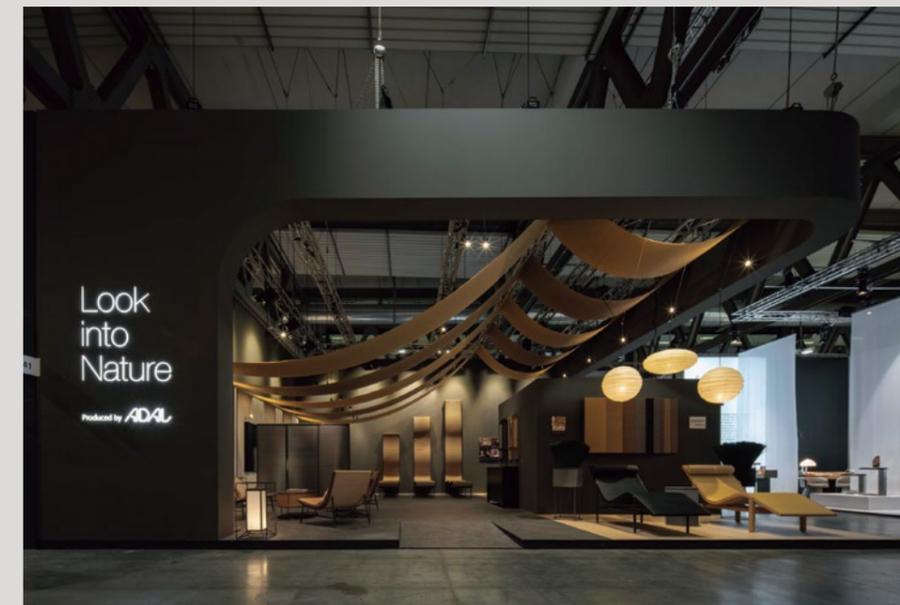


Fantoni *

ジウリオ・ラケッティとマッテオ・ラーニがデザインしたデスク「Decumano」は、個人の作業や会議用など多様なオフィスでの場面に適しており、正方形、長方形、円形のさまざまなサイズがそろそろ。脚部は高さ調整が可能で、仕上げカラーも多様。デザインのディテールは、脚部の構造をクロスさせた接合部にある。同社の既存家具とシームレスなレイアウトに仕上がることも特徴だ(提供/Fantoni)

Adal *

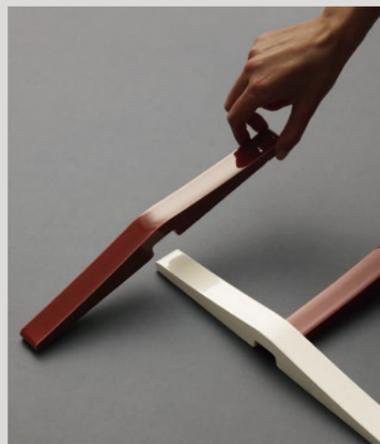
福岡に本社を構える、今年で創業71年を迎えるADAL (Adviser for Amenity Life: 快適な生活空間のアドバイザーの略)は、レストラン、ホテル、オフィスに家具を提供する。フィエラ会場でサステイナブルブランド「Look into Nature」を展開。ブランドディレクションをCanuch Inc.、ブースデザインを浦田晶平 (Old Kan) が手掛け、い草の素材の可能性や応用性についての魅力を発信した。新商品では、ドイツのデザイナーミヒャエル・ゲルトマッハとコラボレートしたイスとテーブル「SAKYU」が展示された(撮影/トロロスタジオ 提供/Look into Nature by ADAL)





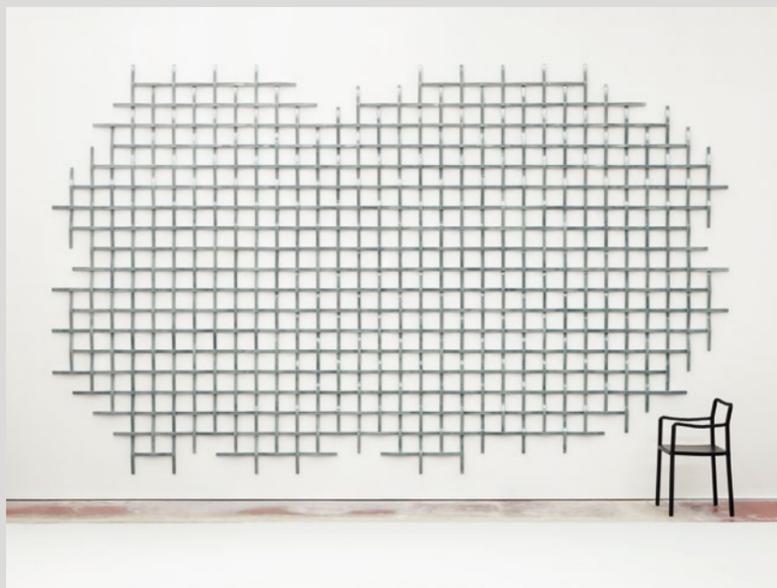
De Padova **

ミラノ在住の日本人デザイナー、オミ・タハラが手掛けたアウトドアコレクション「Afternoons」は、ソファ、ラウンジチェア、テーブル、ベンチ、オットマンで構成される。素材には、耐久性に優れたメタルフレームとPVCロープを使用。ラウンジチェアは1100 m以上のロープで編まれている。手仕事の豊かさを活かし、編みの技法だからこそ可能となる造形美が特徴。厚めのマットレスとボディが調和し「住みこなし」の快適さを座面周りの「くぼみ」となるディテールで実現している (提供 / De Padova)



Mutina **

フランスのデザイナー、ロナン・ブルレックとイタリアのセラミック企業Mutinaとのコラボレーションから誕生した「Adagio」。セラミック製のモジュールシステムで、パーツとパーツが重なる部分のディテールがマテリアルの特性に基づいて考えられており、組み合わせることで、テキスタイルのような柔らかい網目の壁面レリーフを形成する。「Adagio」は、パリのボンビドゥー・センターのパーマネントコレクションとして収蔵された (撮影 / Gerhardt Kellermann)



* Salone del Mobile に出展
 ** Milan Design Week に出展

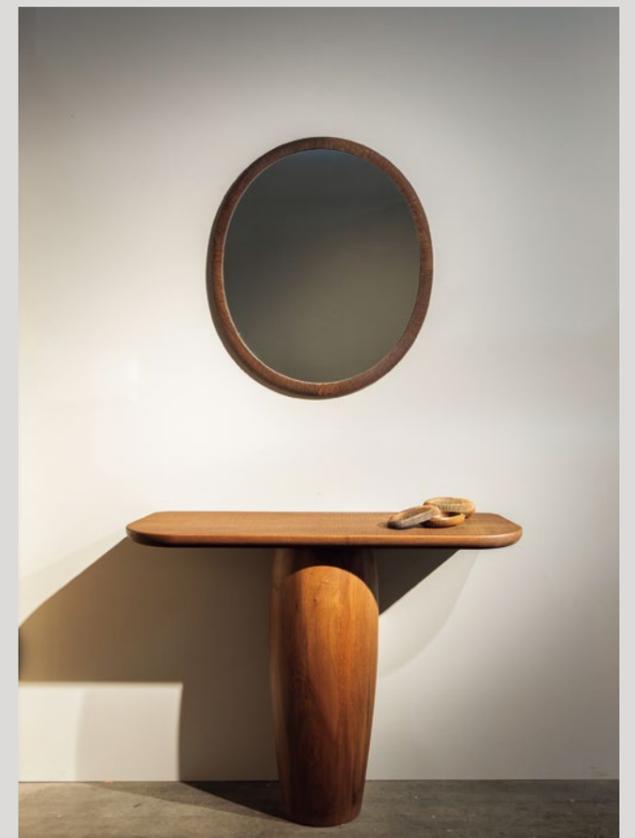


Paola Lenti x nendo **

イタリアのPaola Lenti社が開発した100%ポリプロピレン製のメッシュ素材は、カラーバリエーションが豊富で、耐久性と耐水性に優れた再生可能なモノマテリアル。生産過程で発生する端材を使用し、素材を高周波熱圧着加工で接着させることで、メッシュの一部が硬化したり強度が増したり、光を透過する効果が誕生する。こうした素材の特質を活かしたnendoのデザインにより、花嵐の風景を想起させる家具コレクションが考案された (提供 / Paola Lenti)

Zanat *

サラエボの家具メーカーZanatは、2度の世界大戦とボスニア・ヘルツェゴビナ紛争を乗り越えて、家族代々継承されてきた。近年では、ユネスコ世界遺産に登録されている手彫り技術を現代のデザインに活かすため、世界有数のデザイナーともコラボレーションをする傍ら、若い職人の育成にも精力的に取り組んでいる。新作として、深澤直人による「Genkan」が紹介された (撮影 / Ramona Balaban 提供 / Living Inside)





Danto **

兵庫・淡路島を拠点に、約150年間タイルの製造を続けてきたタイルメーカー・ダントーの展示。多様な産地の土を使い分けるバリエーションが強みで、本展では、建材としてのこれからのスタンダードを目指した70色のタイル「Alternative Artefacts Danto」を発表した。マテリアルの開発や会場構成は、Teruhiro Yanagihara Studioと協働。会場である、8世紀に建てられた空間と対話をするように展示が展開された。また会場では、フランスを拠点とするIndia Mahdavi（インディア・マダヴィ）とのコラボレーションも発表された（撮影／Felix Speller）



Emeco **

第二次世界大戦の真っただ中の1944年、アメリカ海軍は軽量で非腐食性、耐火性、そして耐魚雷性を備えたイスを発注した。Emecoがその課題に挑戦し、「1006 Navy Chair」が誕生。リサイクルアルミニウムを全体の80%に使用し、独自の77段階のプロセスを経て手づくりされており、150年間の耐久性が保証されている。今年で創業80周年を迎えたことを記念し、「Emeco to Emeco」展をミラノ・トリエンナーレで開催。展示アートディレクションをデザイナーのジャスパー・モリソンが手掛けた（撮影／Miro Zagnoli）



Neutra **

Neutraは、大理石と天然石の供給と加工を専門とする、140年の歴史を誇るイタリアの企業。ミニマリストで厳格なスタイルの家具製造におけるノウハウで高く評価されている。モジュール式のローテーブル「MICELO」は、キノコの栄養構造に由来した名称で、二つの異なる彫刻のような大理石の立体を無限に連結していくことで、有機的な風景を表現している。デザインは、スイスのデザインスタジオ Atelier Oi（提供／Neutra）



Sammode **

1967年に製造された筒状の照明器具で知られるフランスの照明器具メーカー Sammode。新作は、四角い断面を備える「Quadratube」で、建築家兼インテリアデザイナーのジャン・ミッシェル・ヴィルモットとコラボレーションしたもの。サイズに応じてガラスもしくはアクリル樹脂（PMMA）のボディで、サスペンション式と2通りのウォールタイプで提供され、素材や仕上げの質感、カラーなど18種類以上から選ぶことができる（撮影／Morgane Le Gall）

